

全身麻酔の先駆け

華岡青洲

華岡青洲（1760～1835年）は、江戸時代の外科医で、内科も外科も共に生体の理を究めるべきであるという趣旨の「内外合一、活物窮理（ないがいごういつ、かつぶつきゅうり）」を主張し、民間療法まで採用して和漢蘭折衷の医方を実践した。そして全身麻酔による乳癌手術の成功は、世界最初の快挙として記録されている¹⁾。

青洲は、手術での患者の苦しみを和らげ、人の命を救いたいと考え、麻酔薬の開発を始める。研究を重ねた結果、曼陀羅華（まんだらげ）の実（チョウセンアサガオ）、草烏頭（そううず、トリカブト）を主成分とした6種類の薬草に麻酔効果があることを発見した。

曼陀羅華の作用は主成分ヒヨスチアミン（アトロピン）によるもので、副交感神経を強く抑制し、中枢神経を興奮させたあと抑制をもたらす。薬物の効果を検討するために動物実験を重ねたとも伝えられるが、ネズミ、ウサギ、イヌ等に投与した時、種差によって効果が大きく異なるのは明白で、麻酔薬の完成までごぎつけたが、ヒトによる臨床試験が必須であり、人体投与を目前にして行き詰まる。実母の於継（おつぐ）と妻の加恵（かえ）がボランティアになることを申し出て、数回にわたる投与試験の末、於継の死、加恵の失明という大きな犠牲の上に、全身麻酔薬「通仙散」（別名：麻沸散-まふつさん）を完成させた。青洲は通仙散による麻酔下で、乳癌だけでも153症例の手術を実施したとの記録が残る²⁾。



写真1 華岡青洲座像（和歌山青洲の里）

青洲が通仙散を完成する過程の労苦は、1966（昭和41）年に出版されベストセラーとなった小説『華岡青洲の妻』に記されている。この小説により医学関係者の中で知られるだけであった青洲の名前が一般に認知されることとなった³⁾。

青洲が世界で初めて全身麻酔（記録に残っ

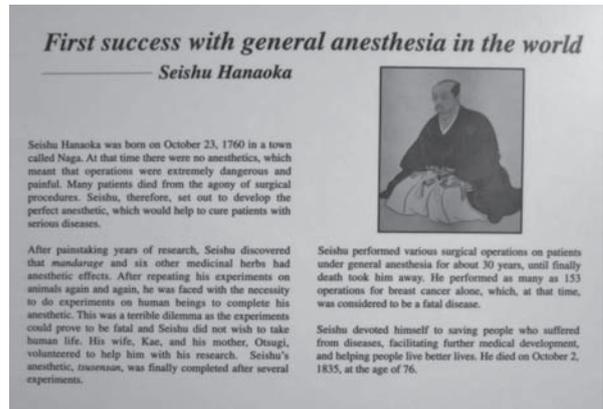


写真2 華岡青洲パネル（シカゴ国際外科医学博物館の展示を撮影2015年）

ている限りでは）下での乳癌の手術に成功したのは、1804（文化元）年10月13日のことであり、アメリカのウィリアム・モートン（Willam Thomas Green Morton）（1819～1868年）がエーテル麻酔の公開実験を行った1846年より40年も先駆けている。

全身麻酔手術の成功を機に、華岡青洲の名は全国に知れ渡り、手術を希望する患者や入門を希望する者が殺到した。青洲は全国から集まってきた彼ら門下生たちの育成にも力を注ぎ、医塾「春林軒（しゅりんけん）」を設け、生涯に1,000人を超える門下生を育てた。

春林軒は、1997（平成9）年に建築当時の場所に復元され、住居、診察室、手術室、講義に使われた主屋等が備わっており、青洲の偉業を顕彰する「青洲の里」の中心施設になっている（写真1）²⁾。

青洲の功績は、1954（昭和29）年に世界外科医学会で取り上げられ、米国シカゴにある、人類の福祉と世界外科医学界に貢献した偉人を顕彰する国際外科医学博物館に展示されている（写真2）⁴⁾。

参考資料.....

- 1) 鈴木昶, 日本医科列伝, 大修館書店 (2013)
- 2) 華岡青洲顕彰施設ホームページ, <http://seishu.sakura.ne.jp/shunrinken.html>
- 3) 有吉佐和子, 華岡青洲の妻, 新潮文庫 (1970)
- 4) 諸澄邦彦, 医療史跡探訪—医学史を歩く—, 201-202, 医療科学社 (2017)

（さいたま整形外科クリニック 諸澄邦彦）